

第6回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

- 1 日時 平成17年8月29日（月）午前9時00分～午後0時00分
- 2 場所 伊那市生涯学習センター〔いなっせ〕 研修室501、502
- 3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
小坂 樫男委員	川島 一慶委員
岡庭 一雄委員	小池 博委員
小林 辰興委員	関 哲夫委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

本日はお忙しい中、また暑くなりそうな中でありますけれども、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

本日、3名の方が週末にご連絡いただきまして、欠席ということでございます。また1名、まだお見えになっておりませんが、伊那インターの混雑のためだと思いますが、定刻になりますので始めたいと思います。

それでは委員長、よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

おはようございます。

それでは第6回の委員会を開催したいと思います。よろしくお願いいたします。

お話のように、伊那インターが少しトラブルのようでございますので、川島委員が少し遅れるかもしれません。よろしくお願いいたします。

今日は、主体をいよいよ「魅力ある」というところに軸足を移していきたいと思います。4名の委員の皆さんからご意見をちょうだいしておりますので、いろいろ議論が進行する最後の段におきまして、またご意見を拝聴したいというふうに思います。それぞれ、小林委員、北原（曜）委員、藤本委員から、いわゆる「魅力ある」という世界の議論でございます。それから、熊谷委員から部会設置のあらためての提案がございますので、後ほど、またご意見もちょうだいしたいと思います。

それでは、事務局から、他の地区の状況も含めて資料説明をいただきたいと思います。

5 資料説明

高校教育課野村主幹教育支援主事から、他地区審議内容について説明。

【説明内容省略】

(池上委員長)

ありがとうございました。

その他の資料はございますか。よろしゅうございますか。

(野村主幹教育支援主事)

資料1がございますが。

(池上委員長)

それは、また後ほど。

(野村主幹教育支援主事)

はい。

(池上委員長)

前回の時に部会の話に絡んで、岡庭委員のほうから県のほうにご質問がひとつございましたので、その件について、確か課長さんのところでまとめていただくことになっておりましたので、よろしくお願いします。

(吉江高校教育課長)

過日、恐らく費用弁償旅費の関係のご質問かと思いますが、ちょうだいいたしました。それにつきましては実際のところ、現在、委員さん方の自由な動きというようなものを必ずしも想定してはおりません。しかし、言ってしまいますと、推進委員会のひとつの動きの中のものということで、明らかにするようなものであれば、費用弁償旅費の支出も可能だとは考えております。

ですから極論を言いますと、例えば委員会としまして独自に学校の視察を、この推進委員会のようなかたちで企画していただいて、その上には、それに対しまして旅費を出させていただくということはございますので、委員会としての個別の活動というような位置付けに明確にしていいただければ、そのようなものの支出も可能かと考えている次第でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

では、そういう方向でやらせていただきます。よろしくお願いします。

それでは、本題にいきたいと思います。私とすれば、2つ、事務局から。あと先ほど申し上げた委員から3つ、それから離れて部会のところで1つということでございます。

まず、候補案が出ているわけでございますので、この内容を我々とすれば議論をしなければいけないという立場にあると思います。それから、『最終報告』の中に、10数ページと思いますが、同様の内容がありまして、コンセプトについての提案がございましたので、そのあたりについてのご説明をいただいて議論に入っていきたいと思いますが。

そんな方向でよろしゅうございますか。

それではそういうことで、よろしくお願ひしたいと思ひます。
それでは、候補案の説明をお願いします。

高校教育課野村主幹教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

6 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。

ここでひとまず説明を打ち切らせていただきまして、ご意見やご質問を受けたいと思いますが、最初に、私のほうから2点ばかりお願ひいたしたいと思ひます。

まず、その4ページの中どころ、「再編後のイメージ」というところでございます。そこから7行目あたりのところのくだりでございますが、「将来的には、生徒数の推移や校舎改築の時期を考慮しながら、赤穂高校の校舎・校地に統合していく」というのが、時期というのは、だいたいどういふスパンでお考へになっているのか。また、生徒数の推移というのは、たぶん推定が難しいと思ひますが、おおむね「校舎改築の時期を考慮しながら」というところがございますが、この内容については、もう少し丁寧に説明をしてください。

(野村主幹教育支援主事)

大規模の改修が分かってございますけれども、これは2007年ぐらいが近いところかというふうに思っております。一般的なことにつきましては、30年が大規模改修ということで、その時期が2007年に当たっていることだと思ひます。改築ですかね。

(池上委員長)

改築が。はい。

(野村主幹教育支援主事)

改築するのが60年。

(池上委員長)

60年。改築が終わったという意味ですか。

(野村主幹教育支援主事)

ごめんなさい。一般的なものとして60年のスパンの話でございます。

(池上委員長)

はい。60年で対象ですか。

(野村主幹教育支援主事)

はい。改修が30年。

(池上委員長)

この学校については、2007 年。

(野村主幹教育支援主事)

2007 年に、大規模の改修に一応当たるとのことですよね。

(池上委員長)

あと、生徒数の推移やということですが、生徒数の推移というのはどのようなご判断だったんですか。

(野村主幹教育支援主事)

第 8 区に属しておりますので、第 8 区の推移という意味でございます。

(池上委員長)

分かりました。

もう 1 点、教えてください。この当表には、必ずしも数字では表しておりませんが、旧の第 7 区の地域につきまして、いただいているデータでいきますと、生徒数の推移が平成 31 年というところまで明らかになっておりますが、平成 32 年というのはいつごろデータとして出るわけでございますか。

(柳澤教育主幹)

はい。お答えします。

この『最終報告』で出ております資料は平成 16 年 5 月 1 日現在のもので、平成 31 年までが出ておまして、今、平成 32 年のものにつきましては、ゼロ歳児ということで、統計上は可能であると思います。

(池上委員長)

そうですか。それ今は分かりますか。

(柳澤教育主幹)

ちょっと今は、手元にはございませんので判りかねますが。

(池上委員長)

そうですか。

これは、トレンドを見る上でのひとつのポイントだと思います。

次に、平成 32 年以後は、これは委員の皆さんからのご意見を拝聴したいのですが、将来はあくまで推定でございますが、このあたりが何か統計といえますか、地域の状況、その他を考えたの類推ができるものか、資料がございますのでしょうか。

(柳澤教育主幹)

『最終報告書』では、日本の人口問題研究所の資料で、今後の人口の動向につきまして出ておりますが、地域・エリアごとの推計というものは、なかなか難しいところがございます。国全体としての、今言いました人口問題研究所の資料につきましては、P20という『最終報告書』の後ろのほうに出ております。いずれにしましても、現在この少子化の傾向というのは、平成32年以降にまた急激に子どもの数が増えていくということはなかなか予想しにくいのではないかと思います。減少の傾向はしばらく続いていくだろうというふうに予測はしております。

(池上委員長)

ありがとうございます。

では、そのお話は後ほどさせていただくにして、今までのところで、ご意見というよりはご質問がございましたらお出しいただきたいと思います。

(藤本委員)

疑問だらけなので、最初のスタート点から、ぜひお願いしたいのですが、吉江課長は、第1回の全体会の説明でこういう説明をしておられます。ちょっと議事録を読みます。

「今回私どもが『最終報告』でいただいたものに基づいて、今後このプランを策定申し上げたといたしまして、恐らくこのプラン自体は、平成30、31年度以降の急激な変化には対応できないものと考えております。ですからこのプランを策定して、これから10年ぐらいにして再度見直しをしてまいりたい」と。このときの言葉も私はきちんと覚えておりますが、平成30年度、平成31年度の急激な変化に対しては、第2次改革と言ったらいいかどうかよく分かりませんが、それに対応するんだと言っておられました。

だから今回の対応というのは、平成27年から平成29年ぐらいまででご検討いただきたい。それがいつの間にか、平成31年というものが出てきているのですよね。

前回、たたき台が出てきたときにそんなに読まなかったのですが、そのときも平成31年が。課長はちゃんと、全体会のとき、平成31年、平成30年は、別途検討するんだと言っておられるので、条件が異なった資料を出されても困るんじゃないですか。

いろいろありますけれど、まずこの点を。

(吉江高校教育課長)

前々から申し上げておりますが、今もまさしく委員長さんからお話がありましたように、私どものほうでは、平成30年度、平成31年度以降が、恐らくまた急激な変化が出てくるであろうと考えております。そうした場合には、この改革で、以上終わりというわけにはいかないのではないかというような意味合いでご説明した経過がございます。

ただ、以前からお話ししておりますように、この3月29日に公表いたしました『最終報告』でベースに置いている数字というのは、ここで明らかになっている平成31年までのものを使っているというのは事実です。ですから、それをベースに76校というような学校数も出していただいた経過がございますので、当然ながらそれをベースに考えているということです。

先ほど来、ご覧いただきましたように、国のものでも、『最終報告書』の P19 ページのゼロ歳から 14 歳の総数の数の推移をまたご覧いただきますとお分かりになるのですが、非常に減少に転じてどんどん減っていきます。その傾向というのが、当然今後も、長野県もあるだろうと推定できます。さらには、先週あたりに国のほうで発表をいたしました、今年の場合にも上半期における、いわゆる生まれたお子さんの数は、亡くなった人の数よりも下回ってしまったということで、日本はすでに少子化というかピークアウトを、当初の計画よりも 2 年早まっているのではないかというような報道もされているような状況でございますので、私どもは、あくまでも『最終報告』を出したベースの平成 31 年というもののまで含まれて、ただこれは、私どもはあくまでも点ではとらえておりません。平成 17 年なり平成 18 年から平成 31 年までの相対の減少の状況を踏まえたものということでお出ししておりますので、そういうことでご理解いただきたいと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。

藤本委員、あと何点ぐらいございますか。

（藤本委員）

いろいろあるので、あとでまとめて。

（池上委員長）

では、もう少し議論が進んだところで出してください。

ほかは、いかがでしょう。

（熊谷委員）

単純な質問を幾つかお願いしたいと思います。

2 ページの箕輪工業高校のところに、「箕輪工業高校が第 3 通学区の中央に位置している」というのは、どうもイメージがわからないのです。諏訪から下伊那までの中央と言っても無理があるのかなという感じがするので、あえてここに「中央に位置している」という強調性の意味を知りたいなあと。その点でいきますと、富士見と伊那大島からの時間を書いてあるのですが、富士見というのは諏訪の向こうのほうでございますが、伊那大島というのは下伊那の一番北の端なんですね。下伊那をイメージすると、平岡駅とか、飯田駅というのは当然出てくると思うのですが、天竜峡なりですね。なぜ、あえて伊那大島にしたのか、不思議でしようがないのです。

それから、1 ページの最初に、平成 2 年と平成 31 年を比較してあるわけなのですが、ここだけ平成 2 年が出てくるんです。あとは全部平成 17 年対比が出てきているのですけれども、どうして平成 2 年対比で統一しないのか、平成 17 年をあえて出してくるのか。これは前にもありましたが、平成 2 年と平成 17 年というのは状況が違うので、最初だけ平成 2 年にするのだけれど、あとは平成 17 年が対比になっているので、その辺の意図をぜひお聞かせいただきたいと思います。

(野村主幹教育支援主事)

2 ページの地理的状況の話でございますが、中央というのは、どういう形での中央ということになるかというのはいろいろあるかと思いますが、ほぼ中央に位置しているというようには認識しております。

それで、富士見駅あるいは伊那大島駅というのが書いてございますが、たまたま調べたのがそういう感じでございまして、例えば、富士見駅から 63 分と言ったのは、遠いと考えられることもできますが、ややその手前ならばもう少し時間が少ないということを単にイメージしているところでございますし、たまたま下伊那の伊那大島駅 41 分ならば、これも通えるかなというような部分で挙げてあるところでございます。

そのあとのもう 1 つの質問でございますが、「平成 2 年のピークに比べ平成 31 年には」という表現が出てきてございますが、それはピークとの比較ということでございます。平成 17 年度というのは現在の状況でございますが、少子化ということに対しまして、今までどのように対応してきたかということで申しますと、平成 2 年のピーク時から平成 17 年に至るまでは、それぞれ毎年検討されています学級減ということで、すでに対応をしてきているということでございます。実際には平成 18 年まで対応することになるかと思いますが、それ以降は、現在皆さんにいろいろ検討していただいております、学校数の減にも含めての対応ということでございますので、今までは学級減で対応してきたと。これからは学校数減、学級減も含めてまた対応していきたいということで、言ってみれば現在の時を基準にしているわけでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかにございますか。

(川島委員)

飯田の川島です。

質問としまして、まず 2 ページをお願いします。「再編後のイメージ」ということで、「箕輪工業高校は工業科を設置しているが、既設の施設設備を使用した体験的な教育を行うことが可能である」という記述があるのですが、前回の配布された資料 8 でもあるように、私のほうにイメージしていました多部制・単位制高校というのは、一般的には普通科だけの高校というイメージがあるのですが、この再編後のイメージですね。これを具体的に説明していただきたいのです。工業科を廃止するのかどうかということ、1 点お願いしたいと思います。

それからもう 1 点、6 ページのところで、下伊那の「近隣校の状況に変わって、飯田長姫高校の工業科を飯田工業高校へ統合するなど」という表現。これが私の理解で初めて出てきた表現なのですが、長姫高校の工業科というのは、「工業科」とはくくられておりますが、「土木」と「建築」という非常に特殊な学科なので、これを総合学科としてその学校の中にコースを開講するのは非常に難しいなあという認識を持っていたのですが、そういう認識を県教委のほうでもお持ちになるのでしょうか。

下農と長姫を統合した総合学科高校というのは、普通科的なもの、農業科的なもの、商

業科的な学科の開講にとどまって、建築・土木はそこに含めるよりも工業に統合したほうがいいという認識を、やはりお持ちになるのでしょうかということです。

（池上委員長）

ありがとうございました。

では、事務局からお願いいたします。

（柳澤教育主幹）

はい、お答えいたします。

最初の箕輪工業高校の工業科の件でございますが、前にお示ししました多部制・単位制高校のイメージについての資料の中では、確かに普通科ということで示してありますが、必ずしも学科につきましては、どういうところに多部制・単位制高校をつくり、どういう地域のニーズやもろもろの条件を考えますと、必ずしも普通科に限ったことなく、いろいろなことが考えられるということがあろうかと思います。

ここでも、必ずしもこの工業科を設置するということではなくて、例えばそういった普通科であっても、選択科目とか、いわゆる全日制でいいますとコース制的なものというようなことでの工夫も、教育課程上で工夫ができるかもしれないということで、ひとつの考え方をお示したということでございます。

6 ページのほうもそれと似たようなことでありますが、今、川島委員さんからございましたように、飯田長姫の工業科の土木・建築でございますが、近隣校の状況の中からの1 つ目の・に書いてございますが、飯田工業高校に長姫の工業科を統合し工業教育の拠点化を図っていくというようなことも、ひとつの考え方としてあるのではないかとということでお示ししてあるわけでございます。

また、総合学科の中の系列につきましても、今私どものほうでどういう系列だということの詳細まで決めてあるわけではございませんので、またいろいろなご意見を伺いながら、実際に実施計画をつくっていく段階で考えていくということになるかと思いますが、そういう意味では、ここにあります農・商・工、こういった関連のものが、ひとつの考えられる範囲としてあるのではないかとということでお示したとういうことでございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

ひとつの考え方と。先の多部制・単位制のほうは、少し感覚が違うかなということですが、2 つ目の長姫の話は、また少しカテゴリーをどうするんだという問題になってくるのだと思います。また、後ほどこれは議論をしていただく問題かと思います。よろしくお願いいたします。

（小林委員）

意見ということです。

3 つほどお願いします。

1 つは流出流入の問題ですが、確かに上伊那は、かつては諏訪への流出が多かったこと

は事実です。しかし、私が再三言っているように流出というのはあくまでも固定的なものではない。状況によっていくらでも変わってくる。現に、私の辰野中学では、たった3年間で、諏訪への流出が60%から30%に減ってきているわけですね。だから、流出ということを固定的にとらえることはやめるべきだと思います。これは、諏訪から今後上伊那へ流れてくるということも十分考えられる、それがまず第1です。

それから2つ目。単位制・多部制についてですが、単位制・多部制についてのイメージが、多くの中学生に受け入れられているのかどうか。これをきちんと調べてあるのかどうか疑問です。たぶん、今の調査をやれば、定時制の枠内の発想をなかなか得られないのではないかと思います。つまり、単位制にしても多部制もそうですが、基本的には無学年制ですね。無学年制というものを本当に受け入れるのは、なかなか学校や社会に適応しにくい、どうしても限りがあると思うのです。

そうなってくると、かなりの定時制が残されたままここで開校しても、極めてわずかな生徒数しか集まらないと思います。そうすると、それだけの学校にしていくのかどうか。先ほど言った、箕輪の工業科、普通科をなくして多部制・単位制だけにしても、1学級が成立するかどうかという、私は非常に危ういがあるのです。そういうイメージづくりがほとんどなされない中でつくっていくところは、非常に問題があると思います。

だから、箕輪工業高校へ持っていくかどうかは別として、多部制・単位制を現在の段階でつくるとすれば、どうしても他学科の併設が必要かなということを私は思います。つまり、例えばこの箕輪工業高校でいうと、単位制・多部制が一方にあって、普通科と工業科が存在したときに、しばらくは、例えば途中から、どうも自分としては普通科に行ったほうがいい、また工業科で勉強をしたいという選択肢が十分発揮できるということが必要であるが今のこの案でいくと、極めて無理な学校になってしまうなということを思います。

3つ目ですが、駒ヶ根工業と赤穂のことです。飯田長姫と下伊那農業は700mの違いですが、それとは違って、駒ヶ根の場合は3.2kmあります。これは、実際にできたときは、先生方がしょっちゅう車で学校を動かなければいけないことになります。そういうデメリットがあってもあえてつくるなら、それなりの「魅力ある学校」にしなければいけないと思いますが、単なる総合選択制というだけでは、地域では受け入れられないのではないかなと思います。

以上です。

(池上委員長)

先ほどの川島委員のご意見と、今の小林委員の意見ですが、たぶん、これらのことは、かなり議論になるだろうと思いますが、取りあえずこの点について、事務局のほうでご発言がございましたら3点お願いしたいと思います。

(吉江高校教育課長)

すみません、ご意見ということでちょうだいいたしましたので、私どものほうも、あまり具体的なお話もできないかとは思いますが、1点、流出入の議論につきましてでは、なかなか難しいお話だと思っております。確かに第8通学区は、以前は非常に出入りが大きいところで、その年によって違っているというような面もございますが、これは、私ども

としますと、ある程度以上議論としましては、従来からそれをベースに募集定員などを決めてきた経過もございますので、どうしても避けては通れない議論かなというような感じもしております。

反面、例えば第8通学区とか、今回私どもが第7通学区で意外でありましたのが、ある意味第7通学区が今の塩尻・松本地区、今の第11通学区に流れるとか、あるいは第12通学区、今の大北地区、この地区が従来から第11通学区、松本の地区に流れるというようなことがございまして、そういう意味では、学校の状況もさることながら、地理的な状況もある程度は流出入には影響しているのかなという気はしている次第でございます。

それと、多部制・単位制の議論は、私どものほうで、最終的にどこの学校がこういうような多部制・単位制になるのかというようなことがありますので、そういう意味では、なかなか設置する学科につきまして明確なことはお答えしにくい状況ではございますが、ただひとつ言えることは、多部制・単位制につきまして、過日見ていただきました富山県の例では、具体的に普通科以外の科を設置しているような状況もございます。ですから、その辺は今後の設置状況などを含めて、どこの学校にどのように設置していくのかというようなことが具体的にになった段階で、ある程度以上明らかにさせていただければと思っています。

当然ながら、今お話がありました赤穂高校につきまして、「魅力ある」、仮にこういうような方向になるとすれば、学校づくりというようなことはもちろん努めていかなければいけないと思いますし、反面、総合選択制というような形の学校というのは、これからの時代の中で、場合によれば、例えば普通科に入った生徒さんが、2学年になったときには、商業科のほうに向いているということで商業科に転学するということも十分可能なようなかたちの、そういう意味で、いったん決めた進路というのを変更できるというようなことも、ひとつの魅力というようなかたちにはなろうかと思っていますから、その辺のシステムづくりというのは、これからも十分検討していかなければいけないと考えている次第でございます。

（池上委員長）

ちょっと固執をいたしますが、小林委員からのお話の中の流出入の問題でございますが、ここのところは、小林委員、特にそれ以外のご発言がございますか。これは、将来の議論に大変重要な話だと思っておりますが、よろしゅうございますか。

（小林委員）

考慮することはもちろんいいのですが、決定的な要素、今の数字で流入・流出というのは、例えば木曽や大町あたりが松本へ流れる状況と、上伊那から諏訪へ流れる状況は、根本的に全然違うと思うんです。木曽や大町から松本へ流れる状況というのは、そう簡単に変えるわけにいかないと思うのです。その地域性の大きさ、小ささという要因がありますので。

ところが、今言ったことについては、大変流動的な要素があるということを加味していかないと、非常にまずいかなということになります。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(岡庭委員)

ここまでたたき台の話をするとは、前回のときは私も思っていませんでしたので、もう踏み込んできましたので、一言、言わせていただきたいのですが、この案そのものについて、私は全く認めるわけにはいきません。

考えてみれば、この案は、学校をいかに減らすかというリストラ案でしかないわけだと思っているのです。ということは、今の流出入の問題も含めながら、1旧通学区が5学級でいくらということですが、先日からの話の中で、今の高等学校の子どもたちの学力の問題ということから考えれば、例えば松川高校を見た場合は、習熟度別の少人数学級をやっているわけです。そうすると、子どもたちの学力の問題から考えれば、実は、30人学級とか少人数学級でなかったら、子どもたちをしっかりと教育できないという状況にあるということも、誰もが認める事実だと、これを認めないということはないだろうと思うのです。

そういうことを考えると、5学級ぐらいは30人学級にする。あるいは、習熟度別の少人数学級をつくれれば、これぐらいは消化してしまうわけですよ。そういうことから考える。

あるいは、実は、駒ヶ根工業高校と箕輪工業高校と、工業高校が2校あることが、上伊那の工業高校を、職業教育にいったいどういう弊害があるのか。だから1つにしなければならぬのか。

あるいは、もっと極端に言えば、下伊那農業高校と長姫高校が、2つ商業高校があることが、第9区の子どもたちの高等学校教育に対してどういう弊害があるのか。その弊害をどうにかたちで解決するために総合学科が必要なのかということが全然ないわけです。現実を、いかに第3通学区の子どもたちの高等学校の教育がどういう状況にあるのか、それをどう直していきたいのかという、そのために今回の高等学校の再編計画がある。

要するに「魅力ある」高等学校をつくっていくために、再編計画をつくるんだとすると、全くそここのところの分析が欠けていて、数合わせだけでやろうとするなら、前から私が言ったように、財政問題だけではないかと。これをやって助かるのは、人件費が減るだけではないかということしか言えないのではないかということを私は思っています。これをたたき台にして検討するということについては、私は非常に疑問があるということだけは申し上げておきたいと思っています。

(小坂委員)

ひとつお聞きしますけれど、これは、たたき台が出たときに、本来は出るべきものですね。あとから付け足したのではないですか。私は、そんな気がするわけです。だから、委員長さん、どうですか。このたたき台を、ここで真剣にいちいちやるということは、まずたたき台のペースに乗ってしまうと私は思うのですね。

ですから、この前もありましたように、ではあとから熊谷さんのほうから出るかと思いますが、前回「じゃあ、郡ごとに考えよう」という話もあったわけです。それは、基本的に了解されているわけですね。諏訪も、たたき台にはのっていませんが、ひとつたたき台にのせていくというお話の結論があったと思うので、やはり、委員長さん、ここでこれを

とことんまでやること自体が意味はないというように私は思っていますので、岡庭委員の意見に賛成です。

（池上委員長）

それでは、承って、また。

ほかに委員、意見がございますか。

（熊谷委員）

岡庭さん、小坂さんのご意見はそのとおりだと思いますが、ただ、資料が意図的につくられている気がします。

そのことだけひとつだけお願いしたいと思います。質問させていただきます。

先ほど言いましたように、例えば駅のところをやるにしても、下伊那はあえて伊那大島ですよね。下伊那といえば、普通飯田駅なり天竜峡なりを取り上げるのがあたり前なのです。それを、あたかも伊那大島を何で出してくるのか。非常に意図的にやっているのではないかという気がするんです。

あと、例えば4ページの上伊那の近隣校の状況には、伊那弥生や伊那北が出てきていますけれど、6ページの下伊那の近隣校の状況では、松川高校も出ていませんし、飯田高校も何も出ていないですね。こういうことは、非常に意図的に資料として作成されているのではないかなという感じがしているので、こういったものがあたかも独り歩きするのは怖いなという感じがしていますので、ぜひその辺のところを、県教委としてももう少し慎重にしていきたいなという感じがしています。

少なくとも、上伊那で伊那弥生なり伊那北、辰野高校が載っていれば、下伊那には飯田もあるし、飯田風越もあるし、松川もあるわけなので、その辺もきちんと触れていただければと思います。

以上です。

（池上委員長）

はい。

北原委員、いかがですか。

（北原曜委員）

今回、考え方を示していただいて助かるのですが、いささか問題も多いのではないかなと思いました。というのは、結局、小規模校、これは工業科だの職業科の入っている高校か地域校になるわけですが、そういうことで、地域校は除外させていくということになりましたので、もともと募集人員の少ない工業科などの職業科が対象になるわけです。そうすると、必然的に工業科、商業科等が狙い打ちという形になるのではないかと思います。

それで、県教委のほうにちょっとお伺いしたいのは、工業科や商業科など職業科の学校、あるいは学科をどのようにしたいのか、どのようにお考えなのか。これは重要なポイントだと思うので、お聞かせ願いたいと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。その点は、事務局のほうでご回答ください。

(柳澤教育主幹)

はい。職業高校のことにつきましては、現在は専門高校という呼び方になっておりますが、基本的な考え方につきましては、『最終報告書』の14ページのところに専門高校のビジョンにつきまして記載してございます。「現状」「専門高校の今後の在り方」ということで、7点にわたって提言がなされております。

1つには、専門教育における基礎・基本をさらに深化させる。さらには現在、職業高校、専門高校を出て進学するという子どもさんたちも多くなってきておりますし、また生涯にわたって継続教育をというような視点で、専門高校の在り方が大きく転換をしてきております。平成7年から、「職業高校」という名前が「専門高校」という呼び方に変わった時点から、大きくこの専門教育の在り方というものが転換をしていきております。

また、配置につきましては、『最終報告書』の19ページから20ページのところにかけて、「専門高校の整備」についてのことが書いてございます。

1つには、その19ページのところにも、学科配置の全国的な割合、右のほうには長野県の生徒在籍状況の学科の割合。長野県には、全国と違いまして水産科というのはないわけですが、また衛生看護科も廃科になっておりますので入っておりませんが、ほぼ全国の比率に近い数字になっているかと思います。

こうした現在の長野県の配置されている状況というものを踏まえまして、その下のほうにございますが、地域からのニーズや産業社会の動向に着目した学科改編の推進をしていくというような観点。さらには、各通学区の中で、専門高校の拠点化を進めていくというようなこと。こういったことを考えながら、全県的な配置のバランスということも考慮して考えていくということが基本的な考え方でございます。

(北原曜委員)

拠点化ということになりますと、第9区では飯田工業高校、第7区では岡谷工業高校。それで、第8区に関してはどのようにお考えなのですか。

(柳澤教育主幹)

通学区が、今4通学区に分かれておりますので、総合学科、多部制・単位制高校については通学区ごとに1校ずつということで、明確に『最終報告書』でも検討委員会から出ておりますが、専門高校の拠点化につきましては、各通学区に1校ずつというような明確なことは出ておりません。それぞれの地域性、通学区の中のこれまでの専門高校の配置状況によっても違ってまいりますので、必ずしも通学区1校ずつということではございませんが、それぞれの通学区の中に拠点化を図っていくということでございますので、今北原(曜)委員さんがご指摘の第7、第8、第9というのは旧通学区でございまして、ここで言っている通学区というのは4通学区というような視点で考えているということでございます。

(北原曜委員)

ただ、それは通えなければ学区の意味がないわけですから、全体を第3通学区で考えるのにはいいのですが、それぞれのところに、やはり拠点が必要なのではないかと考えますが、いかがでしょうか。

(柳澤教育主幹)

例えば志学館は、総合学科は1校でありますので、なかなか全県からというわけにはまいませんが、専門高校の場合は、少なくともそれぞれの通学区の中にきちんとしたものをつくっていくという考えがございしますが、例えばこの地域でいいますと、先ほどちょっと飯田工業と岡谷工業という名前が出ましたけれども、そこを通えない範囲で、どうしても地域のニーズということもあるとすれば、候補案の中での考え方でも出ておりますが、飯田、駒ヶ根工業高校というようなことも、当然、当面はそれを活用していくというようなこともありますので、そういった考え方もあるということでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。この件は、まさに、先ほど小坂委員のおっしゃるように、たたき台から離れて我々がどうするかという議論のところに集約されると思いますので、そういう方向でやらせていただきたいと思います。

(小池委員)

先ほど、小林先生の言われた、流入生徒の関係ですが、先生が言われるように、確かに、状況とか年度や考え方によって多少違ってくるわけです。ただ歴史的な動向を見ていく場合に(これはデータをとってもらえば分かると思いますが)やはり上伊那から諏訪へは相当量入って来ます。その分、諏訪の子どもが山梨県のほうへ動くという推移です。これは事実です。

それと、平成15年か平成16年でしたか、上伊那の方で自校、自地域は大事にしようという形で、諏訪への進路校指導をしなかった例があります。地域校を大事にしようということでやったことですが、その結果、上伊那の方は、各高校がオーバーしてしまうという状況が出ておりました。

先ほど、山梨の話もしましたが、今、大進コースだとか私立であるとかいう方向で、進学希望にかかわり、親も子どももニーズが変容・多様化しております。ですから、先生の言われるように、確かに流出流入の状況というのは流動的であるということは事実でありますけれども、諏訪と上伊那は、特に箕輪、辰野、言ってみれば南箕輪あたりまでですか、(伊那まで行きませんが、)その辺等の数移動が関係します。又、いわゆる調整区の関係、両小野の関係というところは、ある程度今までの推移から考えて、やはり定数的なものが流出をしていくと考えていくことが必要だろうと考えております。

(藤本委員)

先ほどの職業高校をどうするかについては、ちょっとしたプリントを持って来ましたので、またプリントを出したいと思います。

このたたき台ですが、全体的なところで先ほども述べたように、平成 31 年度の急減期を含めてというところに私は不満があるのですが、さらに、細かいことは問題だらけである。

ただ、一言、言わせていただきたいのは、「現地に行って調べたのですか」ということです。飯田工業高校に、長姫の土木科、建築科 2 つを持っていくような敷地も建物の余裕もなく、新たに土地を用意しなければならないですね。さらに、長姫を下農にくっつける、下農は広いからといって、しかし校舎と校地は長姫のほうが広くて新しいのではないのですか。

農業高校だから農地が広いだけであって、きちんとしたデータを出してもらいたいんだけど、その農地はほとんど借地だと聞きましたよ。それで、地主の方々が「返してください」と。中央道から、アップルロードができて、だから、本当に現地にきちんと行かれたのですか。まず、そのことを聞きたいのです。

細かいことはもう聞きません。岡庭委員さん、小坂委員さんの言われるように、無視してというよりも、あまりにも矛盾があるということでこの案をつぶすのもひとつです。

ただ、検討した次の第 2 次案、候補案はあるのですか。例えば、第 2 次案は、別の学校が総合学科というのがあるのですか。

最後に、総数の決定基準、これをきちんと出してください。25 校から 22 校になった、こんなにきれいに割り切れたのでしょうかね。計算式を出してください。

(池上委員長)

今の中で、調査をされたかどうかという問題と、次の案という話は、恐らくそれは否定的だと思いますが。そのところはいかがでございますか。何か調査の方法を、ちょっとあれば教えてください。

(柳澤教育主幹)

現地に行ってということですが、当然このことだけのためにということではございませんが、現地のほうには出向いているということがございます。

また、第 2 次案をとということですが、私どもは現在この候補案を示しているわけでございますので、それ以上のものは持っているわけではございません。ひとつの検討材料ということで、推進委員会のほうにお出ししたということでございます。

それから総数の決定についてでございますが、これは『最終報告書』の資料編の 12 ページをご覧くださいと思いますが、そこに募集学級数の推移が、平成 31 年までの表になって出ております。募集定員は毎年の生徒の動向等を見て決定をするわけでありますので、平成 18 年以降に出ております予想の募集学級数というのは、あくまでもシミュレーションでございます。

欄外にございます(注 3)のところに、「学級数は公立高校についてであり、平成 14 から 17 年の中学校卒業者と募集定員の割合の平均より推定している」と。この平成 14 年から平成 17 年の中学校卒業生、そしてこの募集学級数はもう確定した数値でございますので、

平成 17 年までの推移の平均をとりまして、それを基にして予想募集学級数を出してごさいます。

また、76 校の学校数につきましては、『最終報告書』にありますように 5.5 を目安にということになっておりますので、予想募集学級数の平成 18 年から平成 31 年までの全県のトータルが、今の P12 の一番下の欄に出ておりますが、それを平成 31 年まで平均をいたしまして、5.5 で割り算をして 76 校ということを出してごさいます。

その通学区ごとの校数につきましても、その総数決定基準に基づいた同じ方式で、平成 18 年から平成 31 年までの募集予想学級数の平均を出しまして、5.5 で割り返して校数が出てきているということでごさいます。

（藤本委員）

ただ、私は分かりませんので、式をきちんと出してくださいということを言っているのです。きちんと 25 校から 22 校なんてことはあるわけがないですから、小数点が付いて、四捨五入しているのですから。式で、分かりやすく根拠を示してください。

（池上委員長）

ちょっと待ってください。

（柳澤教育主幹）

口頭で、でしょうか。

（池上委員長）

いいえ、後ほどで結構ですから。申し訳ないが、今の話はあとでもいいと思いますから。問題は、第 2 案があるかどうかということで、これはある意味では第 2 案があっては失礼な話で、我々は何をやるのかよく分からないことになりますから、これは大半の議論が終わって、何かそういう機会があったら出していただくという側面はあるかもしれませんが、それは先生そういうことにしましょう。

（藤本委員）

それほど議論する問題では、ありませんので。

（池上委員長）

何かございますか。

（吉江高校教育課長）

すみません。

先ほどの藤本委員さんからのご質問絡みのお話なのですが、例えば下農の先ほど土地のお話を若干されておりましたが、私どもがあまり表に出す話ではないので申し上げてはおりませんが、おっしゃるようなイメージがあるということはもちろん承知しています。承知した上でお出ししていますが、その辺は、従来から申し上げておりますように、今後の

検討材料ということでお示したものですから、これが仮に、極論を言いますと、今のが、A、Bで、BがどうかというのがA、Bで、Aがいいというような議論になるというようなものは、委員さん方のご議論の中でということで考えております。

あと1点、小坂委員さんからお話をちょうだいしました、初めからというのではなかったかというようなご指摘もいただきました。これにつきましては、ある意味、私どもは、確かこの委員会の折にもそのようなご質問を受けて、私のほうでほかの委員会におきましてもし上げたのですが、いわゆる検討材料ということは、従来から私どものほうでは、変更があり得るといえるのか、当然ながら、委員さん方の議論の中でその材料に使っていただきたいということで申し上げた経過の中で、あまり個々の議論をしてしまうと、かえって固定的になってしまうのでいかがでしょうかというようなお話をした経過があったかと思っています。

これにつきましては、たまたま第5回のそれぞれの推進委員会におきまして、今まで県の教育委員会からそういうような話はあるものの、具体的な議論をするにあたって参考にするので、もっといろいろな資料を出せというようなご指摘をいただいて、過日もこちらのほうの第5回推進委員会におきましても、確かに賛否はありましたが、そういうような委員会で話があったのだったら出したらどうかと、あるいは見せてほしいというようなお話がありましたのでお見せしたということで、後先というような議論については、そういうような趣旨であったということでご理解をいただきたいと思います。

(池上委員長)

よろしいですか。

ありがとうございました。

まだ、ご意見がたくさんあると思います。このたたき台の説明については、おおむね以上にさせていただいて、次にもう少しこだわっていただきたいと思います。『最終報告』の10ページにつきまして、いよいよ学校の内容について幾つか提案がなされておりますので、これについての議論をさせていただきたいというふうに考えております。

時間的に膨大になりますので、ここの時間から10時半までちょっとお休みをいただきまして、今度はそちらのほうの議論をさせていただいて、先ほどそれぞれから資料をご提出いただきましたが、このご説明等をちょうだいしたいと思いますので、よろしく願いをいたしたいと思います。

【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは、時間がまいりましたので再開申し上げたいと思います。

それでは、お手元の『最終報告』をお開きいただきたいと思います。その10ページから、議論をお願いしようとするくだりがございますので申しあげますが、ぜひこれをご参考にしていただいてご意見を拝聴したいと思います。よろしくお願いします。

それでは、この内容については、また事務局でご説明をいただきたいと思います。

(野村主幹教育支援主事)

それでは、『最終報告書』の10ページから、さまざまなタイプの学校という観点のところをご覧になっていただければと思います。時間のない中でありますので、学校の項目を取り上げながらお話しさせていただきたいと思います。

10ページ(2)番のところに総合学科高校と多部制・単位制の高校ということで、2つのタイプの学校を、まずそのページには挙げさせていただいてあります。

総合学科高校につきましては、ここにありますように「総合学科は、普通科や専門学科とは異なる『第3の学科』として」設置されております。「普通科、専門学科と異なる点は、普通科目のみならず職業教育に関する専門科目なども含め、柔軟でかつ大幅な科目選択ができること」にございます。

このように書いてあるとおりであります。本県では塩尻志学館が今までの説明等にあるわけでございます。

「系列」という言葉が今までに何度も出てきましたが、その下に系列に合わせて書いてありますけれども、「生徒は個々に各自の進路に合わせて系列的な選択をすることにより」、系列を念頭に置いてということではありますが、普通科目で重点的に学びたいというものを選択したり、あるいは複数の専門学科に在籍するのと同じような感覚で、当然科目選択ができるということにございます。ただでたらめを取るのではなくて、系列を念頭に置いて取らせるように、教師側からいえば選択させていくということにございます。

今までの資料等と併せてご覧いただければと思います。

それから、多部制・単位制高校でございますが、「多部制・単位制高校は、授業を受けられる時間を午前、午後、夜間」、今まで午前、午後、夜間部などとは言っていましたが、「など、生徒が希望する時間帯を選択して学ぶことができる学校」であります。多部制・単位制高校では、ひとつの学校の中でその3つの時間帯になりますけれども、「時間帯を選択でき、卒業に必要な単位数を履修修得すれば3年以上の修業年限で卒業が可能」になります。ですから、一番早くて、3年でもう卒業ができることとございます。それぞれのライフスタイルや学習ペースに合わせた授業の選択ができるということにございます。

なお、この総合学科高校と多部制・単位制高校につきましては、『最終報告』にはこのように記載してございますが、施策として、1通学区にそれぞれ1校設置という方針で、県のほうでは動いております。

それから、10ページの下に表題として「学びのネットワークを構築するための高校の整備」ということで、ネットワーク化の話が11ページからあります。「連携型県立高校」と書いてございますが、今まで以上に学校間の連携を拡大させるということで、例えば専門学科間とか、普通科と専門学科、全日制課程と定時制課程、通信課程というような異なる高校をネットワーク化させる考え方でございます。下のほうに書いてございますことは、特に単位互換ができるような可能性も発展的にはありますし、また、生徒指導の部分がある程度大きいほうがということでもあります。小さい学校が連携して教育効果が上がる方法を考えていくこともできるわけでございます。

その下に書いてある総合選択制高校は、ここに書いてあるとおりでございますが、「ひとつの高校の中に、複数の独立した学科が併設される場合には、ある学科に在籍する生徒が、

一定の範囲内で他学科の専門科目を選択できる学校とすることができる」ということであります。よくミックスホームルームというなかたちで、ホームルームが学科を混成して編成される場合があります。推進委員会の中では、蘇南高校の例を取り上げて資料とさせていただいたかと思います。ですから、場合によっては異なる2校が統合したようなときに、この総合選択制をとって教育効果を高めることができるかと思います。

ジョイント高校でございますが、「近接する複数の学校が校地(キャンパス)を維持したまま統合し、生徒・教員が各キャンパスを移動することが可能な学校」であります。「複数学科を有する場合などは、生徒の希望により転科も比較的容易になることや、教科・科目の選択幅の拡大や部活動等の活性化も図れる」ということを考えております。普通には、近接する学校の場合が考えられるということでございます。最初の一行目にありますように、統合した場合のひとつの形態というふうに考えていただいても結構かと思えます。

それから、「中高一貫教育校」ということでございますが、中高を一貫、「6年間を接続することで『ゆとり、まじわり、つながり』のある学校生活を送ることができる」ということで、指導も計画的・継続的なものになるというように考えているところです。併設型や中等教育学校、連携型というなかたちで、3種類が考えられてございます。

ただ設置に関してもいえば、普通の中学校は市町村立ということになりますし、普通の公立高校は、我々のところでいえば県立ということになりますので、その形態も少し考えなければいけないところがあるかとは思います。

「e-Learningを活用した高校」ということでございますが、ITのネットワークというような形でできるものでございまして、本当は図をもって説明したほうがよろしいかと思いますが、例えば、遠隔地に別々の遠く離れた場所での授業を、メディアを通してITを使って同時に授業ができることとか、あるいは、ビデオ・オン・デマンドのようなかたち、あるいはストリーミングのようなかたちでサーバーに情報端から入って、どこからでも引き出すことができるようなものを考えてございます。今までのところは(3)にございまいすようにネットワークのことを中心に考えたタイプのものでございます。

(4)としまして、「高校教育の柔軟化への模索」と書いてございますが、「生徒の多様な学習ニーズに柔軟に対応する学校として」のものでございます。

最初に「向学心育成高校」と書いてございますが、ネーミングが悪いというようなお話もちっとお聞きしているところではございますが、基礎力が定着できるように、中学時代のものをより深めるようにする学校でございます。ここには少人数編成講座とか、習熟度別授業、個別指導などが挙げられますけれども、もちろんこのような指導あるいは講座編成が、こういう学校にだけ許されるということではございませんので、どの学校でも当てはまることではございますが、基礎力を定着できるようにということを一番の狙いとしているところであります。

「進学対応型単位制高校」ということでございますが、ここには「大学進学などの進路に合わせて、普通科目の中から」必要な科目を選択し、自分で時間割を組み立てていく。これは単位制になってくるわけですが、「規定の単位の履修・修得により卒業できる」というタイプであります。

それから「総合科学技術高校」であります。高度で専門的な科学技術を産業との関連の中で総合的に学ぶ学校」であります。情報技術などの先端的技術の専門科目を履修でき

るようにすることや、場合によっては理数科を併設することなども考えられ、特に理工系大学への進学を重視していく場合でございます。

次には「全寮制高校」と書いてありますが、ひとつの集団の形態として全寮制も頭に入れているということでございます。高校という10歳代後半の部分の時を、家族と離れた生活で、また就学を経験することで、自立心を育成することができるのではないかと。また、集団生活を通して全人的な成長を促すことが期待できるのではないかと考えているところであります。その場合に寮というのは、学校の近くの県立の寮というだけではなくて、地元住民の方やNPO、あるいは産業界との連携を深めて、既存施設の利用や民間活力の導入を図る等のことが考えられるかと思います。

それから全国募集ということですが、生徒の募集の関係について全国募集をすることができるのではないかと。長野県ならではの程度のある特色がある学科やコースを設けて工夫しなければなりませんが、それによって全国から生徒を集めるという考え方もできるのではないかと考えています。

以上であります。

(池上委員長)

ありがとうございました。

今ご説明があった中で、先ほどのご意見等に関連して、2、3の点を教えてください。

まず、先ほどのお話の中の、小林委員や熊谷委員からあったご意見でございますが、多部制・単位制と定時制の関係が、私にもよく理解できないのでございますが、率直なお話で、こういう形態で学校として形成できるかどうかというご意見と、それから通学距離の問題が出ていたのでございますが、また同時に、ちょっと言いにくいのですが、こういう種の学校自身の社会の期待度というものをどのように分析されているかを教えていただきたいということでございます。

それからもうひとつ、総合学科の問題でございますが、これにつきましての評価の問題ですが、これはそれぞれ委員の皆さんのご意見もちょうだいして議論をしなければいけないと思います。

先ほど北原(曜)委員からございました職業学校をどうするかという問題。これをどのように配置するかという問題についてのご意見を、先ほどご回答がございましたが、これはむしろ主として委員のほうからご提案をいただければありがたいなと考えております。

最後に、今ご説明があった中で、県としては今まで提案されている中では、総合学科とか多部制・単位制が中心でございますが、この中で、特にこれからこのように採用していかうかというような議論があったことを含めてご回答がいただければありがたいと思います。

よろしくお願ひしたいと思ひます。

(柳澤教育主幹)

多部制・単位制と定時制ということの関連はというご質問だったかと思いますが、多部制・単位制の場合は、午前部、午後部、夜間部と、私どもは今3部制でということを前提に考えているわけでございますが、当然午前部だけで所属をして、午前部だけの授業だけ

で卒業に必要な単位を取っていくということもできますし、午後だけでもできますし、夜間だけでもできます。その場合には、通常は夜間の定時制は4年で卒業単位が取れることと同じように、午前部だけで取ろうとしますと最低4年はかかるということでございまして、そういう意味では、多部制・単位制も、一応分けから言いますと、時間も区切られておりますので、定時制課程という分類になるわけでございます。

ただ大変柔軟なシステムでありますので、午前、午後と、通常は全日制と同じ時間帯で朝から夕方まで学ぶ、あるいは午後から夜間まで学ぶ。午前を学んで夜間を学ぶというケースも、まれにはあるかもしれませんが、そういった自分の所属している部と違ったところの部と一緒に取ることによって、3年間で卒業に必要な単位が十分確保できるというものであります。しかも、単位制ということですので、自分で自分の進路に合わせた科目選択が可能である。こういうものが多部制・単位制ということでありまして、一応範疇（はんちゅう）で言いますと定時制ということにはなるわけでございます。

それから、このニーズという点についてでございますが、現在、松本筑摩高校に昼間部と夜間部と、言ってみれば2部制という形をとっておりますが、午前の授業、午後の授業、夜間の授業というように開設されております。これが平成11年に切り替わりまして、昼間のほうは80名募集のところはその定員をかなり超えた応募がございまして、学力検査で残念ながら入学できなかったという方もいらっしゃるわけです。そういうことで、大変ニーズが高いのではないかというふうには理解をしております。

また、前回お出ししました多部制・単位制の資料の中に、生涯学習の観点というものも考えておりまして、そういうことも書いてございましたが、それぞれの地域の多部制・単位制独立校ということで設置した学校には、いろいろなさまざまな地域の方々が学べる、また教える側に立って来ていただくというような地域との連携の中で、生涯学習の中心的な存在というようなことにもなり得るのではないかとということもイメージしているわけでございます。

それから、総合学科の評価というような点につきましては、塩尻志学館高校の、ある意味では成功した要因ということで前に資料をお示ししましたので、繰り返しになりますのでこれはちょっと省略させていただきます。どういう総合学科をつくっていくか、当然それは生徒がたくさん集まって「魅力のある」総合学科をつくっていかなければいけないと思っておりますので、どこの地域にどういう総合学科をつくっていくかを、またいろいろとご検討いただければと思っております。

（池上委員長）

その職業選択科目についての配置について、先ほど北原さんのほうからご意見がございましたが、これに追加のご意見はございませんか。よろしゅうございますか。

事務局からは。いいですか。

（柳澤教育主幹）

結構です。

(池上委員長)

それでは、これからが本当に本番でございます。ご意見を拝聴したいと思います。
いかがでございましょうか。

(藤本委員)

プリントをいいでしょうか。後にした方がよいでしょうか。

(池上委員長)

後ほど、それはお願いします。

関委員、総合学科について、もう少し私に教えていただきたいと思うのですが。評価は、どのように評価されておりますか。先ほど、資料を見てその評価内容を知れという話でございましたけれど、委員としてどのようにお考えかというのを教えてください。

(関 委員)

はい。

幾つか新聞等でも報道されてはいるのですが、総合学科は、卒業生の進学状況も非常によく、また在校生の中で総合学科を選んでよかったと、それから卒業生の中でも総合学科を卒業してよかったという生徒が非常に多いというデータが出ていますので、私は塩尻志学館については成功した例だというふうに思っております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(北原曜委員)

2つほどお伺いしたいのですが、多部制・単位制のカリキュラムというのは、各高校によって違ってくるのでしょうか。例えば、工業科と普通科がある箕輪工業が、今対象になっていますが、そこでは工業科のカリキュラムも入ってくるということなのでしょうか。組み合わせによってちょっと違ってくるかと思うんですね。

それからもう1点は、総合学科というのは、総合選択制の高校と決定的に違うところというのがいまひとつよく分からないのです。

その2つを教えていただきたいと思います。

(柳澤教育主幹)

はい。

多部制・単位制の中のカリキュラムにつきましては、先ほどもちょっと話がございましたけれども、どういう学科を設置するかということによっても異なってくるかと思えます。

また、これは学習指導要領で定められております必修修科目、つまり日本中どの高等学校を卒業するにも、もちろんどの学科もであります。この科目、この単位数という必ず学ばなければならないものというものが定められております。従って、そういうものについては、どの学校でも共通に入っていくということでございますが、それ以外の部

分につきましては、カリキュラムの編成はそれぞれの学校が主体的に行っていくということになるわけですが、どういう学科を設置するかによっても異なりますし、また普通科であっても、今では学校設定科目と言いまして、学習指導要領にない科目までも設定できる大変自由な形になっておりますので、それぞれの生徒のニーズや、あるいは地域の実情などのいろいろなことを考慮しながら、新しい学校ではカリキュラムを決めていくということになると思っております。

（篠原教育幹）

総合選択制と、総合学科の違いということですが、基本的には、総合選択制の場合は、先ほど説明がございましたが、例えば蘇南高校の例を挙げますと、普通科、それから商業、工業と3学科があるわけですが、それぞれ、特に職業学科、工業、商業ですが、これは卒業までに取得しなければいけない専門学科の単位数ははっきりございます。従いまして、あと残ったところで他学科の科目を選択していく。そういう意味では、選択幅はそれほど大きな幅ということではないということでございます。

総合学科の場合は、名前のとおり「総合学科」ですので、一つ一つの総合選択制にあるような学科の縛りはございません。従いまして、科目が設定されていると。ひとつの時間帯の中に、当然複数科目が設定されている。その複数科目の中で、自分の選択したい科目を選択していく。

塩尻志学館高校などの例で申し上げますと、例えば月曜の1限というのを取りますと、系列がそれぞれ8あるわけですが、その系列の子どもたちが、その系列に沿った学習として取らなければいけない科目といったものを、できるだけそこに用意していくという形です。しかし、一コマの中に8は用意できません。従いまして、一般的な科目も含めて、つまり国語とか英語などを含めて中に入れておくというような形になっております。

それからもう1点ですが、総合学科の場合は、先ほどもちょっと説明がございましたけれど、系列に沿ったと言いますが、実際には、やはり専門学科と同じような内容のものも基本的な科目としては設定されていますので、将来的に専門を生かすためのベースになるような科目もかなり多彩にあるということでございます。

そんな違いがあるということでございます。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。

ほかに、ご意見はいかがですか。

ちょっとくどくなりますが、私がもうひとつよく理解できないのですが、先ほど熊谷委員のほうからご指摘がございました多部制・単位制の学校でございますが、通学範囲という世界でどのようなご判断をなされたのか。それをもう一度、繰り返しになるかもしれませんが教えてください。

(柳澤教育主幹)

通学範囲ということですが、多部制・単位制は、例えば午後だけというような時間帯でというような場合、あるいは午前だけというようなこともあるわけでありますので、そういう意味では、かなり広範囲をカバーできるということで、先ほどちょっとご指摘もいただいたわけですが、そういう意味では、候補案の先ほどの説明の中にありました富士見から伊那大島ということでちょっとご指摘がありましたけれども、その辺がこのエリアかなということで考えているところでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

これは、むしろ委員がどうするかというところだと思いますが、学校としてうまく形成できるかどうかというところでは、どんなご意見をお持ちになってございましょうか。

できるからそういう案を出しましたということだったと思いますが、その点をもう一度教えてください。

(柳澤教育主幹)

先ほど松本筑摩高校の例を申し上げましたが、今いろいろな多様な生徒さんが入学してくる中で、自分のライフスタイルに合わせて学びたいということで、前にお示ししました中学校2年生のアンケートの中でも、かなり高い比率でそういう学校があったらいいという結果が出ておりました。そういう点からしますと、今後こういった自分のライフスタイルに合わせて学べる、あるいは自分の進路希望に合わせて得意科目を伸ばせるとか、さまざまな学び方の対応ができるという点ではニーズがあるのではないかなというようなことも考えているわけでございます。

先ほども言いました生涯学習というようなこと、あるいは、もう一度学び直しをしたいというような人への対応というようなことを考えますと、そういう意味ではニーズがあるだろうと思っております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、ご意見を拝聴したいと思います。

(藤本委員)

ちょっと気になったのは、通学区範囲を富士見から考えているということです。ということは、この多部制単位制の学級規模、クラス数が問題で、先ほど小林委員さんが言われたように、とてもこれは独立校として成り立たないのではないかと思います。今の箕工と上伊那農業の定時制と、そこに生涯学習の要求がどの程度あるかは分かりません。今ちょっと気になったのは、諏訪実も将来的には定時制を統合して、これを何とか成り立たせたいのでは。現在考えている、少なくとも独立校ですので、クラス数とか規模は、どのくらいの規模でしょうか。

(池上委員長)

お願いいたします。

(柳澤教育主幹)

現在、明確に学級数というものを決めているわけではございませんが、考えられるとすれば、午前、午後、夜間、それぞれ1クラスずつで3学級というようなことが想定されるかと思います。

また、いわゆる科目履修生と言いまして、科目だけをとりにくるというような生徒さんもおりますし、定・通の併修というようなことで、例えば、現在南信地区からも、松本筑摩高校の通信制にたくさんの生徒さんが通っております。通信制の生徒さんと申しまして、前に資料を出したかと思いますが、上は70歳代から中学卒業までという非常に幅広い方が学んでおられるわけでありますが、そういった方々のスクーリングを、飯田会場、あるいは伊那会場というところで、出張のスクーリングを学習会などということによってやることもあるわけですが、そういった通信制との連携というようなことも、ひとつ視野に入れますと、そういったスクーリング会場や学習会の場など、いろいろな活用も可能ではないかということでございます。

また、諏訪実業の定時制につきましては、本日お示しした中にもございますけれども、地理的な問題から現在のまま定時制を配置していくという考えでいるところであります。

(熊谷委員)

総合学科なり、単位制・多部制について、理屈としてはここに書かれているようなことだろうというように思うのですが、今回の再編問題で、この課題が出ている問題について若干整理をしてもらいたいと思うのです。

第1通学区では、中野と中野実業を統合して第1通学区の総合学科にすると出ておりますね。それから多部制については、坂城高校の全日制を転換すると。

第2通学区でいきますと、今度は丸子単独のものを総合学科に転換していくというようにいっていますし、野沢南高校を単位制にしていくというようになっています。

第3通学区は、ご承知のように長姫と下農の専門高校を2つ統合して総合学科にすることなんです。それから多部制については、箕輪ということですね。

それから第4通学区にいきますと、松本筑摩があるので、多部制はすでにあると。総合学科についてはもう志学館があるというふうなことで、何か総合学科なり、多部制・単位制という改革プランに書かれているものは、格好よくは見えるのですが、再編案をそれに生かしてくると、まさにこじつけてあるのではないかと感じてしょうがないので。

ものごとは何でもそうなのですが、例えば塩尻志学館にしても、県教委は当然うまくっているというように言われていますが、藤本委員の出されているこの図はちょっと説明ないので判らないのですが、私が知る限りでは、あまり志学館は成功していないというような意見も一方にはあるように聞いていますので、何か綺麗事だけで進んでしまっているのではないかなという気がするのです、その辺のところを、県教委として、まさにこの『最終報告』に書かれているプランを、変な話、あまり認めたくないという再編整備候補案に投影したのを見ると、整合性が全然ないような気がするのですけれどもいかがでしょう

か。

（篠原教育幹）

よろしいでしょうか。

今熊谷委員さんのほうから整合性がないというようなお話をいただいて、その前提でも、この多部制・単位制、あるいは総合学科、これらの配置の特色、性格といったものはいただいたわけですが、基本的には、総合学科にしても単位制でございます。それから、定時制課程に属する多部制・単位制高校は、私は「多部」という点も非常に大事な点かとは思いますが、単位制であるという点は、やはりきちんと押さえておかなければいけないだろうというふうに思います。

つまり単位制というのは、これまで、長野県の場合もそうですし、全国的にもそうなのですけれども、長いこと学年制というひとつの大きな仕組みの中で、高校というものが行われてきたと。この学年制は、まだまだ大きな割合を占めているわけですけれども、今うまくいっていない声もあるというご指摘を受けましたが、塩尻志学館高校は、私は個人的にはうまくいっていないという声はあまり聞いていないわけなのです。

やはり分析していく中で、単位制のよさというものを生徒たちが一番感じているのは、自主的に自分の考え方の中で科目を選んでいくことができると。これは、逆にそれを取り巻く教員集団も、そういうことを通じながら、生徒たちの自立性、自主性といったものが育ってきたという分析はきちんとされているわけです。

そういった点で、多部制・単位制にしても総合学科にしても、ひとつ今までとは違った観点から生徒たちを見ていく必要があるという学科である、学校であるというように見ていかなければいけないと思っております。

それからもう1点ですが、これはごく身近なところから聞いている情報ですけれども、例えば、総合学科で申し上げますと、以前にもお話を申し上げましたように、1年次にキャリアガイダンス、これをきちんとやるということですね。キャリアガイダンスをしっかりやっていく中から自分の道を選ぶ。

例えばこんな話を聞いております。中学時代は普通科志向だったという生徒がいて、その生徒が志学館高校に入り1年次にキャリアガイダンスを受けていきます。受けていく中で農業に非常に興味を持って、農業関係の科目をきちんと3年間選択をしていきます。選択をしていく中で、国立の農業の大学に入学していきます。こういった生徒が現に今出てきています。

つまり例えば中学2年、あるいは中学3年の時点で、こういう目的を持ってこういうことをきちんとやりたいから農業高校を選択するという生徒たちが、どのくらいの数いるかということは、以前資料としても出したものの中にあるようなかたちです。

逆にやはり農業というものの素晴らしさ、あるいは商業・工業というものの素晴らしさを見つけていく可能性が、十分なキャリアガイダンスをしていく中で出てくるということです。発想の転換といいますが、新しいタイプの学校で、その新しいタイプの学校が生徒たちの持っている個性、これを多様性と言ってもいいと思うのですが、こういうものを伸ばしていく可能性を秘めた総合学科なり、あるいは多部制・単位制なのだということが言えるのではないかと思います。

以上でございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

（小林委員）

1 件質問をお願いします。意義についてですが、先ほど熊谷さんおっしゃったことと少し関係しますが、総合学科にしても多部制・単位制にしても、いい面もあるがやはり課題もあると思うのです。このことを大胆に出していかないと、非常に行き詰ると思います。ですから、私がさっき単位制・多部制にしていくなれば既学科併設のほうがいいと言ったのは、そういうことです。ぜひそういうことを大胆に出していかないと、「みんないい、とにかく問題がない」では絶対できないと思います。

ですから、そういうことは聞いていないではなくて、やはり今後こういう問題は考える。例えば多部制や単位制というのは、クラスが異学年集団になるわけです。想像できますか。いろいろな年齢の子が一緒のクラスになるのです。そうしたときに今の子どもたちはどこまで耐えられますか。それから4年5年で卒業しても、本当にその子たちの今後のキャリア教育になっていくのかということなど、そういうことを一つ一つ検討した上で考えるべきだと思うのです。

それから、多部制・単位制については、現状はどうであれ、もしこれを実現するとすれば少人数学習はもう避けて通れないと考えております。例えば40人いた80人いた、それだけで教員構成をするとすれば、絶対失敗すると思うのです。ですから、こういう問題についてはこのように対応するというように、実際もう少し考えていかないと非常にまずいかなと思います。

そうしないと、例えば総合学科というのは先ほど言ったように、学科の縛りがありません。これは進学高校にはものすごく抜け道になる可能性があるわけです。あまり必要のない科目、必須科目はもう取らなくてもいいということになると、そういう考え方が十分に考えられると思うのです。だから全国的に実際には進学系の高校に動いていくというのは、それは今の縛りから言えばよく分かるわけです。ぜひいろいろな課題が考えられるので、それについてこんなふうに考えていきたいということをぜひ出してほしいというのが私の意見です。

それから質問ですが、今の縛りについてですが、多部制・単位制もそうなのかということと、それから総合学科では縛りがないというのは、例えば必須科目が普通科の場合よりもどの程度少ないのか、全く必須科目というのは必要がないのか、これが1つお聞きしたいことです。

それから2つ目は、総合学科の場合ものすごく選択幅が広がるわけですが、例えば同じ数の学校の普通科の教員数と比べて、どのくらい違いがあるのかということです。恐らく一定の普通科の生徒数の割合よりも多くないと、意味がないと思うのです。そうすると、総合学科の先生をこの財政難の中で増やすということは、どこかを減らさなければならぬという問題になると思うのです。

それから3つ目は多部制・単位制を導入した場合、今あちこちの学校で出てきているの

は、だいぶ中退者は減ってきているけれども、それでも中退者はいるわけです。中退者の中には途中の中退ですから、大部分が私学の通信制とか単位制の学校へ行く子たちがいて、それでそのような私学はほとんど途中で全部受け入れているわけです。県立の多部制・単位制は途中の進路変更を受け入れるつもりなのか、受け入れないのでしょうか。3 つ質問です。

(池上委員長)

先ほどの冒頭のほうはご提案ということですね。議論の内容を深めろということですね。そうするとご質問の3点をひとつご回答いただけませんか。

(篠原教育幹)

お願いいたします。

議論を深めるために、今小林委員さんのほうからご提案を受けましたさまざまな課題、これについてはできるだけ網羅しながらお答えができるような、そういうさまざまな情報もこれからご提供申し上げていきたいと思っております。

1 点目の必修という科目ですが、現在は必修科目と呼んでおりますが、これにつきましては、一般の学校と多部制・単位制それから総合学科というものが変わるわけではございません。必修について総合学科でもきちんとやっていくということが原則でございます。

それから2点目の教員の数の問題ですが、これは総合学科の場合、いわゆる教員の数というものは普通科に比較しますとプラスアルファというものが制度としては認められております。ただプラスアルファの中で果たして非常に多くの選択科目が設置できるかといいますと、これはプラスアルファがあっても多くの科目、特に生徒たちが例えば10人以下、5人でも6人でも、あるいは進路に必要であれば1人でも1つの講座を開くということになりますと、これはとてもプラスアルファの教員数があっても、足りるというものではございません。そういう中で、塩尻志学館高校も1人の持ち時間数を多くしても、生徒たちのニーズに応えていこうということをしております。

こうした中でもやはり教員たちの声はどういう声かといいますと、かつてのような例えば生徒指導に追われて時間が非常に忙しいという忙しさよりは、いわゆる勉強したい生徒が目前にいて、その生徒たちがたとえ5人でも10人でも講座を開いて、そして持ち時間数が多くなってもやっていく、その忙しさのほうがよくやりがいがあるというふうな意見はいただいております。

それから3点目の途中の進路変更ということですが、現在はいわゆる途中で進路変更をして、例えば学科がまったく違いまして1年から例えば農業科なり工業科なりで必修科目がかなりの単位数に及ぶというものの場合、1年次から2年次へ変わるときに学科を全く変えるというのはかなり難しくなろうと思います。ただ例えば普通科から総合学科へ、総合学科の場合は1年生のときには必修科目つまり必修科目がほとんどですので、普通科から総合学科へ、総合学科から普通科へというのは比較的似た1年次単位数になりますので、これは変更がより可能になるかというように思います。専門学科の場合はかなり1年次から選んでいくものの縛りがあるので、少し難しいかなと思っています。

以上でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

他にございますか。

(小池委員)

私もちょっとそこのところ分らないのです。義務だと教科指導が実質的ということになりますが、それから総合学習、生活科、道徳そういうものを含めて約 980 時間。それからそれにプラスして各校ともいろいろ欠落時間がありますので、多くて 1,050 くらい、1,030 から 1,032、3 ですね。その浮いた分を学裁の時間や各校独自のものを計画し、位置づけるわけ、実質的に 980 時間というのは、きちんとやらなければいけない時数として決まっているわけなのですが、先ほど義務履修の単位についてはみんな同じだよと、総合も多部制・単位制も一般の高校も同じだよ、ということになったわけです。そうすると特徴を表す(遊びと言ってはいけませんが)フリーに設ける時数というのは、実際何時間あるのか。システムとしては違いがあるのだけれど、その概数が分からないので、お聞かせいただけたらと思います。

(藤本委員)

今、篠原先生のご説明、間違っているのではないですか。原則履修科目は 3 つではないのでは。

(池上委員長)

どうぞ、篠原先生

(篠原教育幹)

例えばこういうことがあります。世界史という科目をとってみます。科目をとってみますと、これは必修 2 単位それから 4 単位、こんなふうに分かれているわけです。2 単位でもこれはよろしいということになります。4 単位取る、例えば進学校などの場合は必修で 4 単位さらに選択をしていきます。いわゆる必修の単位数というものが、例えば世界史 A であれば 2 単位でいい、世界史 B であれば 4 単位でいいというふうに幅がございます。どちらを取ってもいいということになっておりますので、学校の性格によって A の方を選択するのか B の方を選択するかによって単位数が変わってくるということになりますから、単位数の幅は当然差が出てくるということになります。

今の総合学科のいわゆる必修の部分の話をしておりましたが、1 年生では総合学科の場合はいわゆる原則履修という科目がございます。原則履修と必修と 2 つ分かれておりまして、必修は通常同じような形で必修科目として履修していきますが、原則履修として産業社会と人間というのが 2 時間ありということでございます。そのように少し細かく割っていきますと、専門的な話にもなってまいります、そのようになっています。

以上でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。私はよく理解できないところなのですが、よろしいですか。

それでは、魅力あるという世界がだんだん細部にわたってまいりましたが、時間の関係でまた次回継続ということにさせていただきたいと考えております。

その前に冒頭でお願いをいたしました、それぞれ委員の皆さんから出ております資料につきまして、大変申し訳ないですが簡単にご説明をいただきたいと思います、小林委員ご提案のご説明をいただきたいと思います。

(小林委員)

すみません。

前回出した資料が少し不備のところがありますので、かなり直して再提出をしました。私の趣旨は、せっかく魅力ある学校づくりということを検討してきているので、今回は再編というものはどうなのかと、本当に必要なのかということでやっていくべきではないかという意味でこの資料を考えたわけであります。

魅力ある学校づくりというのは、既にもう皆さんの手元にある第3通学区の全学校から出していただいたわけでありますので、それをうんと活用して、そこから魅力ある学校づくりというものは何が必要なのかということとを把握したうえで、そこから再編というものがいいのかどうかというふうに考えていくべきではないかということで考えたわけであります。もう少し下から考えていくという立場であります。

それでその方法としましては、本当に魅力ある学校づくりはいろいろあるわけですが、その中で教育課程と学習指導に絞って検討しました。全学校の学科別、課程別、すべての施策を洗い出して、そのカウント数を整理したものが下の表であります。学科によっては幾つもある学校もあり、ゼロのところもありました。その多くカウントされた項目、それから我々自身の自由な発想が、今後の魅力ある学校づくりの視点になるのかなと考えて、そこから出ていった問題とか不明点をさらに追求していったらいかがですかということでもあります。

そこで把握分析と高校再編のかかわりについては、その視点を追求していったときに再編とかかわるもの、再編とは直接関係ないものを明らかにしていくということと、先ほどから問題になっている多部制・単位制、総合学科も条件を探っていくということになると思いますし、魅力ある学校づくりを追求していったら、あまり再編とはかわるものが少ないということになると、再編というのは別の視点で考えざるを得ないと考えて整理してみました。

4、5はデータですので飛ばします。6番目ですが、教育課程を見ますと、魅力ある学校づくりをどこも大事にしているのは、選択教科設定を拡大していくということと、多様な進路に応じた教育課程の編成、これが1つあります。それから、学校独自の指導要領には関係ない学校設定科目も設置している学校もあります。それからコース制、これが非常に多いということが分かりました。やはりこれは魅力ある学校づくりの視点があるかなと思います。そこでこれをさらに推進していったときに、今の教員配置で次の点のクリアが必要になります。

1 つは教員の持ち時間の増加です。それから教員が多分野科目を担当していく。例えば社会科教師が世界史だけではなくて他の分野はもちろんですが、さっき言った社会科に係る学校設定科目、非常に幾つかの科目の担当が必要になってきます。それが難しいということになってくると、教員増が必要になりますが、財政難で困難なら次の点が考えられます。上記の視点が十分満たせる高校を特化集中化して、他については現状の中で工夫するのが1 つです。

それから社会人講師や臨時とか学校兼任講師を増やして対応します。それからこれは可能かどうかが先ほどの議論でまだ分かりませんが、指導要領の枠内で必須科目の調整をしたり、選択教科や学校設定科目の精選をして何とか教員を確保していく。それからどうしてもそれが無理ということであれば、再編によって可能性を探ります。

それから3 つ目ですが、コース制を取り上げているところがいっぱいあるわけですが、よく見ていくと非常に似ているものが多いということと、必ずしも学習意欲向上につながっていない点も指摘されています。この点から考えると、隣接市町村の複数普通科の再編は必要ではないかということでもあります。

それから(2)ですが、学習指導についてです。多く考えられているのは補習、少人数学習、習熟度別学習、資格取得推進、体験的実験的学習の推進がどうもポイントになりそうですが、これを推進するには次のことが課題になります。どれも一斉学習の手法では効果が期待できないので、教師がチームをつくって授業改善の努力をします。これはこの前も言いましたが、高校では少し不十分かなと思います。

それからイは現状の配置の中では持ち時間にゆとりがないと、少人数学習や補習などが非常に難しくなるかなと思います。そうすると1 校である一定限の教員数以上が必要でありますイ、ウについては1 の2 と同じような検討が必要かと思います。

(3)の多部制・単位制と総合学科についてですが、総合学科を導入するなら、多様な大学選択ではなくて多様な進路選択可能な教育課程の編成を意図することで、上記の視点を特化集中すること、どうしてもこれは幾つもつukれないから、結局1 校程度になる。ということになると職業科普通科のジョイント化が条件となるかなと考えられます。

それから2 つ目は、多部制・単位制を導入するなら、先ほど言った(2)の視点を満たさないと魅力ある学校にはならない。現状では少人数単位制にせざるを得ないことに加えて、先ほどの(1)の視点からは既学科の併設が条件であり、先ほども申しましたように、多部制・単位制一本やりでは現状では難しいのではないかなと思います。ここの分析では単位制のよさというものは当然ながら分かりませんでした。

その他、課題を明確にしている学校が非常に少ないので、学校名は出さなくて結構なので、もう少し3 と4 について資料がほしいと、この点が非常に課題として残ります。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。大変示唆にとんだ内容で、私たち門外漢からするとこういう側面がたくさんあるのだということをよく教えていただいた気がします。最後のくだりのところは、これはアンケートを採って確認をしるということを言われているということですね。

ありがとうございました。ご質問や意見は最後にまとめてやらせていただくことにいたしまして、藤本委員恐れ入りますが、ご提出の資料ご説明いただきます。

(藤本委員)

時間もあまりありませんので、塩尻の総合学科はなぜうまくいっているかについて説明します。先ほど熊谷委員さんが塩尻総合学科は失敗だと言われましたが、これは県教委の言うとおりのうまくいっていると思います。

では総合学科への転換というのはどうなっているのかというと、90年代は非常に困難な普通高校や職業高校、普職併設校を総合学科にしてきたわけです。すなわち生徒の多様化、教育の弾力化という本来的な教育目的で総合学科に転換していったのです。それで95年に出された3つの長野県の報告書も、やはり多様化に対応して総合学科をつくらうと、95、6年ごろ長野県も検討したわけです。

95、97年にはこれに沿って蘇南高校、丸子実業など県内の何校かが総合学科になりたいと言って手を挙げたわけです。特に蘇南高校は本当に熱心だったと思います。でもそれらを県教委はすべてつぶして塩尻高校に総合学科をつくったわけです。99年に総合学科の設置一覧を調べましたが、普通科から総合学科になったのが29校、職業科が33校、普職併設校が55校、複数の学校を総合学科に統合したのは、たったの7校でした。2000年になると状況は大きく変わってきて、ここに財政論が出てくるわけです。だから教育論がなくなってきて、統廃合の手段となるわけです。だから職業高校を2つ合わせてということになってくるわけです。だから県教委も普通高校から総合学科とは考えていないのです。それは教員が増える、財政論からです。

後ろへいきまして、塩尻志学館高校が非常にうまくいっている理由です。私は学校を2、3回訪れて先生方とも学習会をいろいろやりましたけれど、大変うまくいっています。県の指導主事が成果の出やすい学校だから決めたと言っておりましたが、理由は職業科の単独校ではなくて、普職併設校であったということです。しかも職業科の基幹小学科を持たなかったということです。だから地域産業界へ、あまり影響を与えなかった。もちろんワインという特色はありました。それからこの通学区内には、非常に専門性をもった専門高校がすでに存在するわけです。商業では松商、穂高商業、工業では松工。それから4番が大きいです。もともと生活指導、学習面では非常に困難な学校だったのです。5番ですが、同窓会やPTAの方々が92年から97年にかけて視察をしてきたわけですが、塩尻市長、塩尻市議会もぜひという要請を県教委にしているわけです。

(6)ですが、県は目玉として非常な熱意を注いだわけです。当時の係長は県教委として目玉的に取り組むと。

(7)は交通の利便性は非常に優れております。だから上田・佐久以外はどこからも通えまして、現に長野からも通っています。では総合学科、これは前から言っていますが、100%否定しません。全面否定しないわけであります。総合学科を希望する生徒も保護者も現にいるし、教育内容も評価されていて、保護者も満足度が高いです。前にも言ったように、学校教育法41条を実現している。すなわち普通教育と職業教育を合わせて行っている。

今、普通高校から就職する生徒と、職業高校から就職する生徒は同じ数ですが、普通高校の生徒たちはきちんとした職業教育をやっていないのです。ここに財政論をもってきて

しまうからおかしくなる。純然たる教育論からすれば、困難な生徒を抱えた普通高校、それから目的意識のないまま入学した困難な職業高校というのが本来的には考えられる。

最後、県教委に１点だけ言いたいのは、塩尻志学館の中退率が低下しましたと言われませんが、全く異なる学校を比較してもまったく意味がないのです。それならば今まで困難な生徒はどこに移動したのですか。他校に移動したわけです。その分析をするべきだと思います。

以上です。

（池上委員長）

ありがとうございました。

（藤本委員）

あ、もう１点。

（池上委員長）

いいですよ。どうぞ。

（藤本委員）

もう１枚は、これは岡庭委員さんから前回出て、今も出ましたが、教育行政は職業高校をどういう位置付けようとしているのか、それが明確じゃないということだったものですから、私がちょっと書いてみました。

戦後教育は、戦前の実業学校それから中学校での差別的な教育の反省の基に、学校教育法 41 条には高校は普通教育及び専門教育、要するに職業教育を施すと書いてあるわけです。ところが、この法律の通り実行されないまま、60 年の教育課程から普通高校と職業高校の差別化がでてくるわけです。60 年度に A 科目、B 科目が出てきて、同じ教科なのに職業高校はレベルの低い教科書で授業を、普通高校はレベルの高い教科書で授業をおこない、ここで職業高校が大学進学から排除されて底辺校化が 60 年度から始まってしまったのです。総合学科は単なる単位制の 1 つの学校であって、第 3 の学科、第 3 の学校といってそんなに騒ぐ学校ではないのです。単位制高校なのですから、文科省でもこう書いてあります。「総合学科では普通教育及び専門教育を総合的に施す」と。これは学校教育法 41 条の内容そのもののものです。総合学科の売りは生徒の主体的な選択と、普通科目、専門科目の多様な選択と。別にこれは売りではなくて現在の普通高校でもできるのです。教科編成は可能なのです。

ではなぜ普通高校で学校教育法 41 条に従って、単位制や職業教育をやらないのかというと、行政が人と設備、予算を総合学科だけに配当しているからです。ではなぜ 3 つの高校を作るのかという理由は後で出てきます。

当面総合学科は各通学区に 1 校つくと、これは文科省の方針です。最近の教育改革国民会議でも総合学科は格段に促進しなさいと書いてあります。文科省から大変な圧力がかかっているわけです。高等学校の教育改革に関する進捗状況という分厚い調査資料、毎年どんどん厚くなる調査資料が出され、各県の高校改革をまな板の上に乗せているわけです。

後ろへ行きまして、第3回の高校改革プラン検討委員会の議事録を見たのですが、葉養委員長さんは第3回ですでに各ブロックに1校ずつ設置すべきと提案し、この委員会でやらなければいけないと。第1回が自己紹介、第2回は県教委の提出した資料の説明会、その後の第3回ですでに委員長がこのように述べられている。では行政と財界は将来的に職業高校をどう位置付けようとしているかということですが、大きく高校を3つに位置付けようということです。要するにエリート育成の普通高校を2割、専門性の職業高校を2割、あとは総合学科に。普通高校ではお隣の関先生がおられる諏訪清陵高校のスーパーサイエンス高校、それから上伊那農業高校はスーパー専門学校として、1千万円、数千万円という金が何年間にわたって配当されているわけです。

文部省の当時の課長は5,000の高校のうち1,000や2,000が総合学科でもおかしくない、ただ心配しているのは財政だと言っているんです。これは一貫した方針であって、高校改革プラン検討委員会は職業高校は各通学区に拠点校化する、1校にして、だから3通は1校にして、あとは学科改編するなり総合学科へ転換すると述べられております。

(2)は、第1回検討委員会にマスタープランを県教委は出しましたが、(4)や(6)に書いてあります。職業高校は1校だけ残して、あとは全部総合学科にと。そういう非常に太い流れがあるわけです。

吉江課長も非常に考えがふらついております。飯田のシンポジウムで吉江課長の発言は総合学科どんどんつくっていきたいというものでした。前回の第5回の発言は、1校はいいけれど、2、3校はよく考えたほうが良いということでした。県教委もまた非常にばらついているわけです。

ただこれは太い流れですが、そこに大きな壁、財政問題が出てきてしまった。教育論ではなく財政問題ということです。しかし将来の方向はこうなのです。財界は95年の新時代の日本的な経営のなかで労働力を3つに分けるんだと。これは3つの高校にきちんと対応しているわけです。柔軟型グループ、非常に専門性のグループ、それから長期活用グループに、これは出たときに柔軟型グループとして総合学科に期待する財界の多数の発言が出ておりました。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

北原(曜)委員、前回資料出していただきましたが、今のような議論の経過でございますので、もうしばらく魅力あるという世界を議論を検討していきたいと思いますが、次回にひとつよろしく願いしたいと思います。

それでは、時間でいろいろ言うのは問題がありますが、熊谷委員、ご提出の部会の話でございますが、前回のご趣旨は同じというふうに伺ってよろしいですね。

(熊谷委員)

はい。

(池上委員長)

それでこういう最終的には地区の意見というのが当然尊重されるというのは、それはそれなりに正しい意見だと私は思います。ただ冒頭にも課長のほうからお話がありましたように、そういう側面と同時に委員会の方針にやはりそここのところは詰めていただいて、そのあとで地区はどうするんだという議論に至らないと、必要以上に時間もくってしまうということになりますので、それを挙げた後で地区の問題もありということにさせていただきたいというふうに、同じ発言を申し上げます。

それで特に下伊那地域、諏訪地域、上伊那地域それぞれ生徒の動態の差はございますが、顕著なのは、下伊那地域がかなり減少傾向が強いということもありまして、そうすれば、今のままで部会をつくって検討して、今までの流れ、要するに下伊那地域の流れのようなご発言が顕在化するということであれば、委員長としてはちょっと承服できないところも出てまいりますので、そのあたりも少しご発言いただければありがたいなと思いますが、いかがでしょうか。

(熊谷委員)

あまり申す気はございませんが、ただ今の委員長さんのお話で下伊那地域は中学生の卒業生の減少率が甚だしいというご認識でしたが、資料見ていただければ分かりますが、第7も平成2年に対して54%ですし、第9も54.7、上伊那は若干20%ですが、極端に低いということはないというふうに認識しています。全県平均でも55.4%ですから、認識を持っておりません。そういう意味ではちょっと認識が違うかなという気がしております。

ただ前回も言いましたが、委員長さんがおっしゃるようにいったん方向が出てからうんぬんということでございますが、時間的な余裕等々の観点からいかがかなという気持ちでおります。非常にあいまいな言い方かもしれませんが、飯伊地区でやられた議論が、相当真剣な議論はされておりますので、決して無鉄砲な方向性が出るとは思っておりません。

以上です。

(池上委員長)

減少の問題はどのスパンを取るかという議論ですから、それは結構でございますが、次回にどういうご提案をなされようとしているのか、そのあたりをお話いただければ、それは検討の余地があるのではないかという中で、委員会で検討していくということでしょうか。出していただけますでしょうか。地区でずいぶんご議論があるということはよく伺っておりますので、いかがでございましょう。

(熊谷委員)

議論の内容ということですか。

(池上委員長)

ええ。

(熊谷委員)

非常に難しい。検討させてもらいます。

(池上委員長)

よろしくどうぞお願いします。

今日は、教育次長の松澤さんが県からわざわざお越しでございますので、方針その他を大変申し訳ないのですが10分ぐらいの時間で拝聴できればありがたいと思いますが、よろしくお願いしたいと思います。

(松澤教育長職務代理者)

今、池上委員長さんからご紹介いただきました、教育次長の松澤でございます。第3推進委員会の皆様には、大変ご熱心な議論をちょうだいしておりますことに対しまして、心から御礼を申し上げる次第でございます。今までなかなか時間が取れず、私この委員会に本日初めて出席させていただきました。もう1人、教育担当次長の米澤次長がおりまして、4つ推進委員会に、時間がつく限りその議論に参加をさせていただきたいということで、時間を調整しながらやってまいりました。

内容につきましては、そのつど担当の吉江課長や米澤次長のほうから、この第3通学区の推進委員会の進ちょく状況についてお聞きをしております、委員の皆さんに大変ご熱心にやっていただいているということで、感謝をしているところでございます。

第1回の委員会が5月29日にございまして、その際推進委員会に対して議論をお願いする点を、それぞれご説明申し上げたところでございますが、やはり基本的には魅力ある高校づくり、また高校の再編整備について、もう1点総合学科高校や、多部制・単位制高校の在り方等について、ご議論をいただきたいということでお願いをしておりますので、その方向につきましてご議論いただいていることに大変ありがたく思っております。

今、特に私のほうからあれこれ申し上げることはございませんが、限られた時間の中で大変ご熱心にご議論いただいておりますことに感謝を申し上げまして、今後ともよろしくお願い申し上げたいということで、ごあいさつに代えさせていただきます。

どうもありがとうございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それではこういう方向でいきたいと思いますが、今日は魅力あるということを中心にやらせていただきましたが、次回も継続してやらせていただいて、ご提案も幾つかございませう。従いましてそれをやらせていただいて、さらに学校数の問題も議論を当然のことながらやらせていただくという方向で次回もやらせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは次回の期日....。

(藤本委員)

吉江高校課長に伺いたいのですが、高校改革プラン検討委員会の議事録を読んでいるのですが、最終回とその前の議事録の公開がホームページ上でいまだなされていない理由を伺いたいのです。最終回とその前がいまだホームページに載っていない理由だけ教えてください。

(池上委員長)

では、どうぞ。

(柳澤教育主幹)

最終回のところ誠に申し訳ございません。まだきちっとできておりませんで、早急に対応したいというふうに思います。

(藤本委員)

76 校、5.5 学級が決まった重要なところで私は読みたくてしょうがないのです。

(柳澤教育主幹)

はい、早速に対応したいと思います。今作成中です。

(池上委員長)

ではそういうふうにご了解いただきたいと思います。

では次回の件につきまして。

(岡庭委員)

委員長。

(池上委員長)

はい、どうぞ。

(岡庭委員)

さっき委員長さんが言った、第 9 通学区の見解を熊谷さんに示せという話あったのですが、私は部会を熊谷さんのように全体の地域の住民の皆さんからの含まれた部会というのについては、その方向を見ながらいいと思うのですが、県教委に対してかなり見解が違っているんですね。

例えば第 7 通学区と第 8 通学区の見解も違っているし、第 9 通学区は第 9 通学区で県教委が分析したのと若干違っているわけで、それではここで全体で議論していてもなかなか話題になってこないのではないかと思います。そういう点では通学区の出ている委員がある程度、収斂(しゅうれん)してまとめてみるということも大事じゃないかと思うのです。

いつも見解の違ったところから議論しているというのでは、どうも魅力ある高校づくりとはかみ合っていないのではないかと思いますので、そういう点で第 9 通学区にそういう形で委員がいろいろ意見聴いてきて次回報告しろということですから、そういうことを委員長

の、この会の制度として次回はそういうようにやったらいいんじゃないかとお認めいただければいいのではないかと思います、その辺はどうでしょうか。

（池上委員長）

そのところは、まったく同感でございます。たぶんこの次は、上伊那も諏訪もという話だと思いますので、それはそういう方向でいきたいと思いますが、結構ですが。

（岡庭委員）

1 点総合学科の塩尻志学館ことで少しお聞きしたいのですが、要するに桔梗ヶ原の農学校で。職業科のほうは、どうかたちになっているのかというのをお聞きしたい。普通科にどうも傾倒してきたのではないかという話。

もうひとつは、先ほど藤本さんの話のように、要するにあの地域の言ってみれば進学をうんと希望する子どもたちは塩尻市のどこへ行って、それから習熟度何とかというところの子どもたちは、今まで桔梗ヶ原へ行っていた子どもたちは、全部総合学科高校というかたちで拾われたと、そういう言い方は大変失礼でございますが、入学が許可されてめでたしめでたしになっているのかどうかという点、次回までにお伺いしたいと思っております。

（池上委員長）

次回でよろしいですね。

それはお願いできますか。では、よろしくお願いします。

（熊谷委員）

すみません。

参考資料として結構でございますので、再編候補案の第1、2、4ですか、この資料として、これと同じようなのをつくっていると思いますので、本日示された第3通学区の候補案の詳細の詳細ですね。これについて、資料としてお願いしたいのですが。次回で結構です。

（池上委員長）

いかがでございます。よろしいですか。

はい、それではそういうことでよろしくお願いします。

それでは次回に入ってよろしいですか。では、次回の日程についてよろしくお願いします。

（野村主幹教育支援主事）

はい。

いろいろ議論をありがとうございました。次回の日程につきましては、9月9日の金曜日でございますが、午前を目途に考えております。場所は今回と同じように伊那でできればと思っているところでございます。また委員長さんともご相談のうえ、あらためてご案内を差し上げたいかと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

それから一部の委員さんに打診をし始めているところでございますが、その次のところ

20日あたりがどうかという話をさせていただいているところでありますが、ちょっと出られないというご返事の方もいらっしゃるようで、再度また調整させていただきますので、20日に固執されずにお考えいただければと思います。またこれについてもご連絡したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

以上でございます。

（池上委員長）

9日はそういうことですが、20日の前後について特にご意見ございましたら、ご意向もありましたら、ここでおっしゃっていただけても結構でございます。

これは9月の20日がいいなということですか。これはよろしいですか。

（野村主幹教育支援主事）

申し上げるのが少し落としてしまいましたが、前回でいえば諏訪実業あたりも商業科の高校を見たいというお話もございましたので、できれば諏訪地区で開催をと考えております。飯田でやったときは会議を減らしてやった経緯がございますが、今度は会議は会議として確保したいと思っております。

視察につきましては、お時間のある方というかたちでする方向でございますが、よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

はい、ありがとうございます。それについて特にご意見なければ、そういう方向でいきたいと思います。よろしいですか。

（小林委員）

ちょっといいですか。

そうすると、視察を含めると終日ということになるのですか。

（野村主幹教育支援主事）

はい。

学校視察をするときに、せっかくですのでもう1校もとか、その辺の調整ありますし、また委員さんのご都合等もございますので、絶対に出てもらわなければ困るというようなかたちではなくてやりたいと思います。

（小林委員）

その場合、会議は午前中か午後どちらですか。

（野村主幹教育支援主事）

どちらになるかちょっと分かりませんが、いろいろ調節する中で決めさせていただきたいと思います。

(小池委員)

20日は確定ですね。

(野村主幹教育支援主事)

申し訳ありません。その20日、先ほど申し上げましたように、出られない方が。

(小池委員)

流動的ということですか。

(野村主幹教育支援主事)

ええ、流動的ということをお願いしたいと思います。

(池上委員長)

では、よろしいですか。

それではまだ5分残しておりますが、今日はこれで終会をしたいと思います。

大変ありがとうございました。